

	ページ・行	誤	正
加筆	P8. L12	親や子どもたち自身の	先の章で取り上げた調査対象家庭などの親や子どもたち自身の
修正	P44. 最後の行～ P45. L4	1960年代以降、欧米では、階層間の不平等問題と関連して、早期選抜問題が社会的な研究対象や教育政策上の課題となっている。しかし、現代の日本社会において、小学校受験は階層間の不平等問題を伴う早期選抜問題とみなしうるにもかかわらず、いわゆる「お受験」としての興味本位の揶揄や批判の多さに比べ、その実態が明らかにされてきたとはいいがたい。	小針誠は「階層問題としての小学校受験志向—家族の経済的・人口的・文化的背景に着目して—」と題した論文にて、「欧米では、1960年代以降、早期選抜の問題がしばしば階層間の不平等の問題と関連して社会的な研究対象や教育政策上の課題になっている。」と指摘した上で、「日本における早期選抜としての小学校受験は、マスコミ等によって「お受験」などと様々に揶揄・批判されているにも関わらず、その問題についてはこれまでほとんどといってよいほど明らかにされることはなかった。」と述べている（日本教育学会『教育学研究』第71巻第4号所収）。現代の日本社会においても、こうした状況に大きな変化はなく、小学校受験などの早期選抜について、その準備教育も含めて「お受験」と称し、その過程に対して興味本位で揶揄をしたり、感情的に批判したりすることが多いのではなかろうか。
削除	P55.最後の2行～ P56. L3	日本の学校教育には、公教育と私教育が存在している。大まかにいうと、公教育は国家・地方公共団体が財政を負担して、国民に平等な教育機会を付与する制度であり、私教育はその教育を受けることを希望する人が授業料などを負担する制度である。国立小学校や公立小学校による教育は前者に該当し、私立小学校による教育は後者に該当する。	削除
修正	P80. 最後の2行	教育社会学者の天野郁夫によれば、私立小学校から上級学校への優先的な内部入・進学は、諸外国にはみられない日本独自の進学方式であるという（『教育のいまを読む』有信堂高文社）。	教育社会学者の天野郁夫によれば、 <u>エスカレーター校は、少なくとも欧米諸国にはみられない、「日本的」な学校のかたちである</u> （『教育のいまを読む』有信堂高文社）。この見解をふまえつつ、小針誠は、「 <u>私立学校の併設上級学校への優先的な内部入・進学制度は、諸外国には見られない、むしろ日本独自の進学方式である</u> 」と示している（『〈お受験〉の社会史—都市新中間層と私立小学校』世織書房）。
加筆	P92. L3～4	多くの私立小学校は、既存の公教育（特に公立小学校）における教育活動に対するアンチテーゼとして設立された経緯をもつが、	小針誠によれば、 <u>多くの私立小学校は、既存の公教育（特に公立小学校）における教育活動に対するアンチテーゼとして設立された経緯をもつが</u> （『〈お受験〉の社会史—都市新中間層と私立小学校』世織書房）、

修正	P260. L5 P318. L1、9 P328. L4	通学している	通学していた
修正	P276. L10	10件	10 <u>県</u>
加筆	P328. 最終行 P339. L12	低学年の	低・ <u>中学年</u> の
修正	P334. L7 P336. L5 P337. L3	1年生の保護者の声 2年生の保護者の声 3年生以降の保護者の声	1年生の <u>時期</u> の保護者の声 2年生の <u>時期</u> の保護者の声 3年生以降の <u>時期</u> の保護者の声
修正	P364. L12～13	なお本研究は、JSPS 科研費 JP25381124, JP17K04706 の助成を受けたものである。	なお本書の一部は、JSPS 科研費 JP21730666, JP25381124, JP17K04706 の助成を受けた <u>調査等</u> によるものである。
修正	P366. L14	小針誠 (2002)	小針誠 (200 <u>1</u> )
加筆	P366		小針誠 (2004)「階層問題としての小学校受験志向—家族の経済的・人口的・文化的背景に着目して—」『教育学研究』第71巻4号、422～434頁。
削除	P367.L1	小針誠 (2021)『国立・私立小学校の入学志向に関する実態調査報告書 (首都圏版・速報値)』。	削除